



ちゃいんどネット大阪・マッセOSAKA共催講座

マッセ・市民セミナー（河北ブロック）

開催日：平成23年6月6日（月）

会 場：門真市市民文化会館ルミエールホール 小ホール



「子どもの成長を軸にした保護者支援と対応」

大阪総合保育大学児童保育学部 学部長
大方 美香 氏

1. 保育施設の社会的責任

「子どもの成長を軸にした保護者支援と対応」というテーマをちょうだいしているのですが、先ほど中辻さんのお話を聞かせていただいても、まだ国の動向としてよく分からないとお感じの方もいらっしゃるかと思います。

これからどんどん、こども指針など具体的なことが出てくるだろうと思いますが、このテーマに沿って言わせていただきますと、すべての保護者の方々、今までいわゆる専業主婦という形でいらっしゃった方々が、働きたいと思えばいつでも働ける体制を国として取っていく。ワーク・ライフ・バランスという言葉はきれいですが、むしろどんどん働いてもらわないと国として困るという部分が限りなく見え隠れしており、そのためには、私たち保育に携わる者が、少し働きたい方、長く働きたい方、緩やかに働いていきたい方など、いろいろな働き方に対応できる受け皿となり、保育界がそれを担っていくということが求められているのだろうと思います。その中にはもちろん、大変な子どもさんのケース、病気のケース、そして家にいらっしゃる方々に対するケアなど、いろいろなことが織り込まれてくると思っていただいたらいいのではないかと思います。

もう少し分かりやすく言いますと、私もそのワーキングチームに入っているわけではありませんので、どちらを向いていくのだとはっきり言える立場ではありませんが、私を感じるところで言うならば、かつては病気の方が出れば家族で見るという時代があって、お医者さんが往診してくださいました。それがだんだん総合病院型になって、家に来るのではなく私たちが病院へ行くという形になり、そして今また地域医療、在宅医療へと、大きく流れが変わっています。

同じ厚生労働省の管轄で言うと、介護の問題も、自分の親なのだから、また

は嫁ぎ先の親なのだからということで、当然家族が看る、場合によってはお嫁さんが看なければならぬ時代がありました。それを社会的にみんなが看ましようという形になっています。女性の方が働くには、介護の部分を国や社会が担っていかなくてはなりません。子育てと両方やっていくということに無理が生じますし、許容量として、核家族という形態では看っていくことが難しいわけです。

いつを昔と言うのかも難しい問題ですが、昔は当たり前だったこと、誰かが我慢してきたことも、今は状況が変わってきています。地域や親戚で助け合っていたし、環境としても広い家があって、空間があった。その中なら徘徊する方がいらっしゃっても、また地域の理解もあったけれども、マンションにおじいちゃんやおばあちゃんを置くことを考えるときに、縛り付けておくわけにいかず、かえってご近所の迷惑になったり、勝手に出て行って迷子になって帰れなくなったりする。そういったいろいろなことから介護の問題が取り上げられるようになり、介護保険ができて十何年がたちました。今ではいろいろな形のサービスが行われています。在宅で看ようという気持ちはあっても看られない方の方が増えて、その中に株式会社が入り、NPOも入り、社会福祉法人のところもあって、それをいろいろな方々が利用者側の在り方によって選んできた、また、選べる時代です。お金を出して行かれる方、介護保険の範ちゅうで行く方、いろいろと出てきて、何となく一巡してきたかなという感じですが。

これは私の予想ですが、恐らくこれと同じことが子どもの世界にも下りてきています。子どもの世界は、いい意味で皆さん興味を持っていただけなかったもので、保育界にいる私たちが守ってきた部分もあります。逆に言うと、手付かずの世界だったかもしれません。今、大きな意味で国も注目し、それこそ選挙のキャッチフレーズに子育て支援という言葉が入り、子ども手当も入ってきて、みんなが子育て支援という単語を知るようになり、みんなが子ども手当という言葉に反応するようになってきました。でも、保育を担ってきた皆さま方してみると、急に嵐がやってきて、今までやってきたことは何だったのかもよく分からず、ぐちゃぐちゃになるようなイメージをお持ちの方もたくさんいらっしゃるのではないかと思います。

結論から言うと、一つは今日のテーマですが、人としての尊厳です。子どもたちには子どもたちの、人として命を与えられ、これから成長していくとい

う大きな意味の人権があって、人として育っていきます。私たちが専門家として、また行政としてもどうしても忘れてはいけないのは、どれだけシステムが変わったとしても、親が働く・働かないにかかわらず、親子であるということ、家族であるということは人が人として生きていくときにどういう意味を持っているのかということです。それは専門性のある方々がちゃんと伝えていけないといけません。これは私も含めて大切な社会的な責任だと思っています。

システムが変わるときには、良くも悪くも変わってしまいます。けれども、時代が変わっても、保育の世界で守ってきたことは本質的に何だったのかということ、名前が幼稚園とか保育所とかということを超えて、子どもを育てていくのだということです。子どもが誕生して小学校に行くまでの成長発達の時期、人間が人間らしくなっていく時期であることを、忘れてはいけません。そのことをもう一度私たちはしっかりと踏まえて、保護者にもいろいろいらっしゃいますが、最低限そのことを伝えていく努力をしなくてはなりません。

そして、大きな意味では、子どもがこの国の未来を担っていく上において、乳児期・幼児期は小学校の学校教育以上にとても大事な役割をしている。そのときに、親子、家族という役割もとても大事なのだということ、第三者の社会の方々に分かってもらえるような情報提供、説明を、私たちはしていかなければなりません。

ひっくり返せば、どうもあのお母さんはしんどい、何で親なのにこういうことができないんだろう、「あなた、親でしょう」というように批判的になったり責めたりすることのないように、「親なんだから家で見ればいいじゃない」ということになってしまわないようにしながら、社会の情勢が変わってきている中で、どう伝えていく努力を怠らないようにするのか。人間教育をしていく上において、どれだけ時間がたっても、どれだけ時代が変わっても、人が人になるという育ちの発達は決して変わることがありません。多文化の方々を受け入れたとしても、どこの国のどの子どもさんも、人間である以上、成長・発達の順序性・連続性は変わらないのです。

人としてその子をどう尊重し、その子の尊厳を守るか。これは、まず子どもの成長を軸にするということです。何を軸に、何を基準に私たちが判断していくのかといったときに、まず人間教育をするのだということをぶれないように

し、そのことを第一義的に保護者に伝えていかななくてはなりません。おむつを替えるとか、ミルクを飲ませるとか、長く預かるとか、どんな遊びをするとか、そういう枝葉の部分は、預かっている時間における私たちが創意工夫をしなければならない課題です。でも、たとえどれだけ長い時間預かったとしても、特に、通所型の保育所、幼稚園も今度こども園になっていくのかどうか分かりませんが、総合施設というものになったとしても、乳幼児期を預かるということには変わらないので、まず、保護者の方々に子どもの成長という第一ボタンを掛け違えないように伝えていくことが大切です。大人になったときに掛け違えてはいけない親子のきずな、家族のきずな、そのためにどういった子どもさんへの接し方を家族として求めていくのか。たとえどれだけ忙しい保護者が来られたとしても、これは伝えていかなければいけないポイントです。

どれだけお父さん、お母さんがしんどくても、その方なりの触れていき方、接していく方法を、できるだけ分かりやすく、具体的に伝えていく。たくさん課題がこなせる保護者にはたくさん言ってあげたらいいですが、1個ずつ、たとえ1秒であってもできることはあるはずです。そういう視点に立って、子どもの成長を軸にした保護者支援と対応を考えなくてはなりません。恐らく総合施設になることで、実際にいろいろな財務上のことが変わってくるので、人手はどうなるのかなど、右往左往する部分があります。しかし、どれだけ変わっても、そのことが本来私たち幼児教育に携わる者の責任であって、それが私たちの仕事です。どうぞ人間教育をするということから外れないようにお願いしたいと思っています。

2. 保育士と保護者の違い

今、新指針ができて幼児教育が変わったところですが、こども指針という名に変わっていくとも言われていますので、どう変わっていくのかは分かりませんが、発達を大事にしていくこと、子育て支援・保護者支援をしていくということは、その部分がより強力になっていくかもしれませんが、大きな意味では恐らく今までと変わらないと思います。そのことが、現行の保育指針では第6章に位置づけられた、社会的責任、親との密接な関係の意味合いです。

親子という前に、園と家庭の連携を考えておく必要があります。連携というと仲良くするとか、サービスすることだと思いがちですが、そうではなく、子

どもを預かっている時間が長くなればなるほど、家での時間が短くなればなるほど、昨日はどういう暮らしをしていたのかということに思いをはせることが大切になります。そして、短くても家に帰っていくわけですから、保育所の生活と家の生活のどこに段差があるのだろうということに気付く、そのために家庭と連携していくのです。

保育所にいる時間の中で、私たちがしなければいけないことがあります。家庭に全部といっても、滞在時間が短い人がますます増えていくので、全部は無理です。でも、短いからこそ、この段差というものを考えておかないと、結果的には子どもを理解することが難しくなります。逆に言うと、子どもたちはカルチャーショックを毎日受けることになります。幼稚園や保育所ではこう言われていて、家に帰るとお母さんが真反対のことを言う。先生は「お友だちのことをたたいちゃ駄目よ」と言うのに、家に帰ってから毎日たたかれているようでは、子どもたちの考え方はぶれていきます。または、家でたたかれて園にやってくると、園でそのことを再現します。ままごとだけが再現遊びではありません。今、地震ごっこが問題になっているように、強烈な体験であればあるほど、子どもたちには再現欲求が出てくるので、それがリアリティを持って表現され、表出していきます。つまり、ダメージを受けたことの方が記憶に残って、俗に言うトラウマになりやすい。だから出てきます。楽しいことの方が消えていきやすいので、再現しにくいのです。

今までは、ご飯を作るというのは、家庭が貧困であればあるほど買うよりも作らなければいけなかったもので、当然どこの家でも、中身は別として作る手順を見てきました。でも、今は、経済がしんどいほど、買った方が安いので作りません。再現するべき場面を見ていないので、ままごと遊びというようなことは、家にいる時間が短い子どもさんほど、「思い出す」以前に「見ていない」ということになるのです。ですから、ままごとやお店屋さんごっこという遊びも難しくなっていて、遊んでいない子と遊んだ子、見てきた子と見ていない子では子ども同士のコミュニケーションも取りにくい、イメージを共有しにくい時代に入っているということです。

ですから、私たちが家庭と連携するということは、保護者には1個ずつなのだけれども、子どもの置かれている実態を把握するにはとても大切なことです。子どもは幼すぎて、家がどういう状況かということをも単語やある一部分は言っ

てきても、全部べらべらしゃべってくれるわけではありませんし、もちろん保護者も全部言ってくれるわけではありませんが、「家ではそういう食事場面なんだな」、「そうか、家では食べずに寝てしまっているんだ。だから朝はこうなんだ」、「時にはお風呂にも入らずに寝ていることもあるんだ」、「ご飯といっても、車の中で食べながら帰っているんだ」、「この子、家に帰ったらママとしゃべる暇もなくお布団に直行してるんだ」、「家に帰ってせっかく寝ているのに、必ずパパが夜中に帰ってきて、起きて、テンションが高くなって、朝方になって寝ているんだ」ということが分かってきます。

最低限、生理的欲求といわれている食事、睡眠、排泄という家に帰っても継続しているであろう中身については、私たちは知ってはいなくてはなりません。教育的なことはこちらでさせていただくとしても、まず生活がそこにあるわけですから、食事、睡眠、排泄、そして情緒の安定にかかわってくる部分が家庭でどういう状態なのかということを知って子どもを見ないと、結果的には子どもを理解できず、子どもが園の中で注意ばかりを受けることになります。また、園の先生方も「なんで」と子どもを責めてしまうことになります。

「なんでと言われても、先生、僕んちの普通はこっち」と言ってくれたら分かりますが、言ってもらうことができないので、私たちはつい、クラスという集団では、落ち着いている子どもとその子を比べてしまいます。でも、もともと家での生活が違うわけですから、子どもたちを保育所や幼稚園に来ているときの生活だけで比べてしまうと、かなり誤差が出てしまいます。だからといって一人ひとりに合わせられるわけではないのですが、気付いてあげるという視点が大事なわけです。ちょっと気付いていれば、かける一言も変わるかもしれません。

乳児のとき、最初に出会った先生は書類を見ます。だんだんと持ち上がっていくと、前の担任の話聞きます。でも、この子が生まれたときからどういう生活をしてきたかということは、書類には書いていません。この4年間、家庭でどんな暮らしをしてきたのかということに思いをはせてください。「保育所といってもあちこち転々として、うちの園は5件目で入ってきたんだな」「家庭といっても引っ越しが多いおうちだったんだな」「初めて乳児保育を受けたのはベビーホテルだったんだな」「あそこでの対応は今も引きずっているのかな」。忙しい忙しいこの保育界ですし、まだまだいろいろ課題が出てくるの

で、少しでいいのでそういうことに思いをはせていただければと思います。全部でなくてもいいのです。

でも、子どもの成長を軸にするということは、最初、誕生した場所からのボタンの掛け違いをイメージしてあげないと、最初のずれを積み残したままだと、小学校に行ってこの課題を解決することはとても難しいです。特に、幼稚園型で来られた先生は、3～4歳から見るとということが習慣になっています。今後こども園型になり、総合施設化になったとき、年齢の低い子どもさんを預かれれば預かるほど、そのところに視点を持っていかないと、「4歳ってこれぐらい違うの?」「3歳までは家の仕事で、全部お母さんが悪いんでしょう」と、全部お母さんにフィードバックして返さなければという視点で考えていくと、今回出てくるこども園とか総合施設化ということには、限りなく対応が困難な状態が生まれてきます。

その結果、子どもたち自身の成長の中で、出会った大人は誰も何もしてくれなかったということになります。ここが問題なのです。出会った人は、出会った責任があります。たとえ短時間であっても、たとえ親がいたとしても、出会った時間の中で、その子の心の中で、どんな大人に出会ったかということがこれからの最低限最善の利益になります。何をしてあげたということではなくて、出会った大人が「あんな大人になりたい」というモデルになる。出会った大人である先生方が、「家ではしんどいけれども、先生みたいな大人になりたい」という、大人のモデルにならなければいけないのです。

保護者に対してもそうです。フレーベルの時代から、お母さん方に「子どもってこうやって育てるんだよ」というモデルとしてできたのが、世界で最初の幼稚園の位置づけだったわけです。ですから、これからは、できれば「ご飯を食べさせるというのはこういうことですよ」と、お母さん方に示してあげてください。これは私の願いです。クローズされた環境ではなく、特に短時間利用型の方、今は幼稚園を利用されているような方々が今の保育所型のところに来られたときには、少し時間に余裕があるわけですから、全部お任せとならないようにしていただきたいのです。

せっかく短時間で家に帰って晩御飯ぐらいいっしょに食べるのだから、「こういうふうにご飯を食べさせたらいいのですよ」、「これぐらいいちょうどいい分量ですよ」、「子どもってこういうリズムで食べたらいんですよ」、「子どもってこう

いうふうにしたら笑えるんですよ]、「しゃべっていないように見えるけれども、こういうふうには声を掛けることで、ちゃんと言葉力が出るんですよ」というようなお母さん育ての部分、保護者を育てていく部分、「こうしなさい」ではなくて、見て学ぶ場面を少しずつイメージしておくことが大切です。

もちろん、しんどい方にはそんなことを言っても無理です。でも、今の保護者の時代を考えると、思い出していただかなければいけないのは、視覚文化の時代の方々が親になっているということです。ですから、先生方が一生懸命親を説得しようとしても、実は耳で聞いてイメージする力が今の保護者にはとても難しいです。または、そういうことを大事にする子ども時代を実は育っていなかったのです。

テレビ、パソコン、携帯、ネット社会もそうです。あれは、文字で書いてあるように見えますが、テレビと同じように文字も視覚で見ているのです。電話というのは耳で聞いてイメージしていた時代ですが、携帯メールというのは見てイメージする時代です。ですから、実は使っている脳が全く違うので、これからは特に、保護者の方々には視覚に訴えるようなものにしないと、先生がしゃべればしゃべるほど意味不明、何を言っているのかよく分からなくなってしまふのです。

では、手紙はなぜ読まないのかと聞きたいところですが、手紙のインク文字は沈んだ文字です。見てくだされば、分かります。テレビというのは、文字が書いてあっても、後ろから照らしています。特に3Dになると、平面ではなく立体文字なのです。パソコンの文字も、浮いているのです。携帯も、光を通して見ている文字です。ですから、白黒テレビを見ているようなものです。カラーテレビに慣れた私たちが、今更白黒テレビは見にくいと感じるのと同じように、インクの文字というのは、紙そのものが上質紙ならいざ知らず、わら半紙、ざら半紙で、さらに白黒文字だと文字が沈んでいるので、目に入らないのです。目は見るのですが、印象として意識に入りにくいので、保護者の方々は読まないのです。せっかく印刷物として渡しているのに、今の保護者は、色または立体文字で見るという習慣が付いているので、見ているけれども記憶に入りにくいということなのです。

本も今、カラーのものしか売れません。雑誌も、新聞でも、カラーでないと売れなくなってきていますし、本もパソコンやTwitterの中でないと、いわゆ

る単行本では売れなくなってきたということです。学校教育や保育というのは、どうしてもこの辺のところの後回しになってしまいます。もちろん国の予算も、なかなかそんなところまで入れてくれないのが現実です。ですから、いつも最後になってしまうのが学校教育と保育界なのですが、実際に世の中を歩いている保護者の方々は、白黒文字の世界にいてるのではなくて、違う社会が多数の中にいらっしやる。そのことをイメージして対応するというのを考えないと、保護者の方々に一生懸命手紙を出しても、一生懸命説明しても、「言われた」、「注意された」、「しかれた」、「先生はいつも私に何か言いたいらしいけれど、そのときの先生は怖い顔をしている」となってしまいます。文句を言われたような気分、苦情を言われたような気分、指摘されたような気分になってしまって、結果として先生方が本当に伝えたい部分が保護者に伝わらないのです。

そうすると、会う時間が短ければ短いほど、伝え方も考えていかないといけません。短い時間に何を伝えるのか、何を一番に言うのか。そして、先ほどの人間教育の視点にもう一度戻っていくと、一番伝えなければいけないのは、この子たちはお母さんが嫌いなのも、お父さんが嫌いなのもないし、嫌いで悪いことをしているわけでもなくて、どれだけ長い時間預かっていても、ママのこともパパのことも大好きなのだということです。親を求めている子どもたちなのだということを、どれだけ通訳でき、橋渡しができるか。それができないと、子どもが成長する上で、親子関係も含めて将来にたくさんの禍根を残すことになります。

そして、たった1秒でも、親子のきずながうまくいけばいくほど、子どもたちは安定し、自分という人間に自信を持ち、次のステップに進みます。自信というのは、偉そうにすることではありません。少なくとも親を嫌いになったり、恐怖の対象としてしまったり、将来恨むような子どもにしないようにすることです。そうしないと、特に小学校以上、思春期に向かった成長の軸が大きくぶれていきます。

皆さんの仕事は、単に幼児期に預かるというだけではなくて、出会うのはこの時期ですが、「人間教育」と言ったように、20歳になったときの子どもをイメージして、今何が大事かを考えないといけないのです。子どもは、お母さん、お父さんの背を抜いて必ず大人になります。いつまでも子どもではないのです。そのときのために、今どういう親子の在り方、きずなを作っておけばいいのか。

親御さん自身が年を取っていったとき、どういうことが子どもによってなされていくのか。ここが親子と先生の違いです。

ですから、成長を軸にしたときに、保育士の役割と、保護者である親御さんの役割は、年齢は似ていても同一ではありません。ここを私たち自身が間違えないようにしないとイケないのです。私たちはある一時期を預かります。そのとき、残念ながらまだ親御さんは専門家ではないですし、中には生んだけれども親らしく育てていない方や、生んだことそのものをまだ受け入れられない方、生んだけれどもどうしていいかわからない方がいます。まだ6年未満で、十分親になり切れない未成熟な状態の方が、特に今の時代は多いので、専門家が肩代わりをするのだと理解していただいたらいいです。

そして、ますます働く方々が増えるので、より利用する方々が増えていきます。その期間、誰とも出会わなければ、誰もケアすることがなければ、子どもは人間の姿をしながら、人間として生きていく力が作れません。その力を作ることで、培うこと、育つこと、また育つためのチャンスの種を誰もくれなかったでは困るので、今回、国を挙げて社会的にこれを支援していこうとしているのです。支えていかないと、大変な時代が来ているということです。これは、誰が総理大臣になろうと関係のない現実です。それだけ子育て力の低下が始まって、もう何年もたってきているということです。

今から20年前の、テレビが始めて、パソコンが始めていて、まだゲームというものが当たり前ではなかったときならば、保護者の力を先生方が思うイメージにアップすることができました。でも、今の保護者は、保護者が子ども時代に既に、テレビがあるのが当たり前、紙おむつが当たり前、ゲームで遊ぶのが当たり前でした。ゲームといっても、すごろくではありません。若い先生の中には、すごろくがわからない人がいらっしゃいます。学生にすごろくなどと言ったら、「何?」「さいころって何ですか?」と言われます。ゲーム＝パソコンゲームだと、ほとんど100%の人が思っています。「ゲーム? 家庭版?」などと思っているのは、古い時代の人になってしまっているのです。それぐらい世の中は変わってしまっているということに、いち早く気付いて対応しないとイケないのです。

3. 問題を抱える保護者への対応

しかし、一番子どもと保護者に近いのが保育界のはずなのに、残念ながら、一番気付いていないのが保育界だったりするのです。もうそれだったら変えていかないと仕方がないなということで、国を挙げて良くも悪くもチェンジアップがされて、サービスなどといううれしくない言葉が使われるようになり、もしかしたら株式会社やNPOの方がずっと現実路線に沿ってやってくれるかもしれません。会社という組織は最も市場に合ったことしかしないですし、そうでないものも売れないですから、最も市場のニーズに近いのです。それなら、その人たちが参画した方がいいのではないかということで、今回は株式会社も全部入ります。そういう意味では、私も含めて、保育界も反省しなければいけない部分も無きにしもあらずだと思います。「これは全部親がすることでしょう」と言うのは簡単なのですが、できない方々がそこにいて、どうしようもないから、これだけ虐待が増えているわけです。そして、この間からまだまだテレビをにぎわしているように、虐待における残忍性が高くなっていて、保護者自身が既に虐待を受けて大人になってしまっています。

かつてマツトぐるぐる事件がありましたが、いじめというのは今に始まったことではありません。親による暴力も、25～26年前に、日本も含めて世界的に出ていました。でも、保育界はずっと「まさか親がそんなことするわけがない」と言ってきました。数字を見ても、「自分の子どもにそんなことをするなんてあり得ない」とずっと言ってきたのです。でも、今や、ちょっとぐらいではニュースも取り上げないほど、日常化されてしまっています。死んでしまって初めてニュースで取り上げる次元です。いろいろないじめを受けて、そのときの恨みや怨念を返すような人、そのときに心がねじれて自分の子どもすら愛せない人間嫌いの人が、今、親になってきているのです。

ですから、人間教育をするということは、今きちんとボタンの掛け違いをしないように、たとえ保護者でなくても「大人が好き」、「先生が好き」というように、身近なモデルとして大人にあこがれる子どもにしておかないといけない。家に帰って親がしんどければしんどいほど、「保育所の先生、幼稚園の先生はすてきな大人。あんな大人になりたいな」と子どもたちが心に種をまかないと、「大人なんて最低。大人なんて何もしてくれない。いつか私が大人になったら、必ず仕返ししてやるんだ」という種が芽生えたら、大変な時代がやって来ると

いうことです。だって、その子たちは必ず大人になるのです。

ですから、20年後、保育所の門の前に立ったときに、「ああ、この保育所で育ったことが懐かしい。あの先生がこうしてくれたな。うちの親は何もしてくれなかったけれど、先生はこうしてくれた。家では何食べたか覚えていないけれど、保育所の給食はおいしかった。温かった。みんなで食べてうれしかった」と思ってもらえるかどうか。生理的欲求の満足とは、好き嫌いをなくすことではありません。もちろん好き嫌いはない方がいいのですが、だんらんという時間、家族で食べるという時間が短ければ短いほど、食べるという生きる楽しみはどこで味わうのかということです。

食べるというのは、見て楽しんで、味わって楽しんで、人と一緒にご飯を食べて、にっこり笑って、生きる喜びを感じることです。好き嫌いはない方がいいです。でも、家で食べる楽しみを味わったことのない子が入ってきたときには、まず「食べるというのはすてきなことなんだ」ということから入らないといけません。家に帰ったら「食べればいい」、車の中で「とにかく早く食べな」、暗闇で何を食べているのかも分からない。保育所でも食べる時間＝しかられる時間になっている。家でトイレのことで怒られて、保育所でも怒られる。

今回の津波や地震で被災された方を見ても分かるように、根源的欲求、生理的欲求の満足が人の尊厳につながります。何もなくなったときに何を求めるかという、まず水が欲しい、まず食べるものが欲しい。でもその前に、人は人のぬくもりを求めます。ですから、どれだけ大変な子どもさんも、保育所や幼稚園に来たら、まず人間がそこにいて、人のぬくもりがある。「長い時間、ママはお仕事してるんだよ。でも、ここにいたら暖かいよ、1人じゃないよ」ということです。その次に、「のどが渴いたら水があるよ。おなかがすいたら食べるものがあるよ。独りぼっちじゃないよ。みんなで食べたらおいしいよね。絵を描くのがうまくなくても、走るのが速くなくても、おなかいっぱい食べるだけで、ちょっと幸せだよ」という心、これが次のステップです。

そして、そのことに満足する中で、だんだんとマナーを身に付けていきます。みんなで食べるときは、スプーンの方がいい、おはしの方がいい、さらに、こぼすよりはこぼさない方がみんなが気持ち良く食べられる。そして、安心しておなかがいっぱいになるから眠れるのです。おなか为空いていたり、のどが渴いては眠れません。「ママはいつ来るんだろう」、「また怒られるな」とド

キドキしていたり、怒られたまま泣き寝入りしたりでは、安心できない。緊張感が取れないと眠れない。そうすると、情緒が安定しない。家でも保育所でも寝不足で、いつもいらいらしている。大人でも、寝不足になったり、おなかがいっぱいにならなかつたり、のどが渇いたりしていらいらすると、情緒の安定というのは保証しにくいです。だから私たちは、家でどういう状況かということ、親を責めるのではなくて、さりげなく把握することが大切なのです。

ここで親を責める態度が少しでも見えると、保護者は絶対に本当のことを言いません。隠されると真実が見えなくなるので、実態を把握することはできなくなります。ここを間違えないようにしてください。子どもたちの事実を知るために保護者にどう向き合うかということが大事なのであって、親を批判するため、あるいは「あなたの性格を変えなさい」と言うため、指摘するために話を聞くのではないのです。ところが、子どもがかわいいという皆さんの思いがあるがゆえに、聞いてしまうと、どうしても言いたくなってしまいます。でも、言った瞬間に警戒させてしまうので、真実が隠されてしまいます。そうすると、「何かおかしいな」と思いながらも真実が分からなくなるので、ぜひそのところを間違えないようにお願いします。

4. 保護者への伝え方

では、保護者とはどんな人でしょうか。先ほど、先生とは違うと言いました。では、ちょっとやってみてください。親指と人さし指で丸を作ってください。今、いろいろなやり方をしている方がいました。皆さんは、ちょっとドキドキしたかもしれません。周りをきよろきよろ何う方もいらっしゃいます。当たり前です。もし今、きよろきよろしたいけれども何とか我慢したという方は、明日、子どもたちがきよろきよろしたときに、どうぞしからないようにしてください。保護者の方々が「え？」という顔をされても、おしかりにならないでください。

つまり、私たちは、分からないときは人を見る。それが当たり前なのです。先ほど、見られるようにしてくださいと言いました。見て学ぶ、見てまねをるところから、人間の社会は始まります。どうすればいいか分からないとき、発明するわけではありません。何かを見て、「ああ、こうするんだ」と経験し、見て、確かめて、「一緒だ、よかった」と安心します。見ないと心配です。イメージ

だけでは安心できません。特に視覚文化に慣れている保護者は、そのことが高くなっています。見て確認するという時代になっているだけに、子どもたちも一緒です。見えないものは分からないという感じです。ですから、乳児のときに見て分かるという経験があって、幼児のときに耳で聞いてイメージする、記憶にある。そして次のステージとして、自分流に、自分らしく自己表現ができればなおいいですが、自分らしくという前に、まずまねをします。言葉もそうです。まずはまねをして、オウム返しをしながら、だんだんと自分らしくしゃべれるようになります。「おはよう」と言ったら「おはよう」と言いながら、自分流にできるようになるのです。

ですから、最初はまねから入ります。それなのに、「真っすぐ前を見なさい」と言われると、まねをできない環境を作ります。きょろきょろしていたら、まだ分かっていないのだな、自信がないのだなということをイメージしてください。ちょうど2歳ぐらいでまねっこ遊び、模倣遊び、見立て遊びをします。逆に言うと、まねをしないということは、見ていないのか、ぼんやりしているのか、または見て覚える力、記憶力が育っていないのです。見立てができるということは、覚える力、記憶する力が育ったということであり、さらにそれを再現するという力、表出する力が育ったということです。

背が高くなるとか、しゃべったとか、歩いたとか、動いたとかということだけが成長・発達ではなく、ありとあらゆることがこの時期に育っていきます。ですから、専門家である私たちは、育てるとは何かということ、別に丸暗記しなくても本を見たりでも結構なので、2歳とは何者か、4歳とは何者かということを知らなければなりません。知らない、できた・できていないという世界に陥ってしまいます。これは非常に怖いことです。

今、私の言った言葉は「親指と人さし指で丸を作しましょう」です。「片手で」とも「両手で」とも言っていないので、片手でも両手でも正解なのです。私たちはつい誰が正しいのか選びたくなる傾向があります。しかし、誰も選んではいけないのです。みんな正しかったのです。つまり、同じ言葉を聞いても、イメージするものは同一ではないということに、私たちは気付いておかないといけないのです。私たちは裁判官ではありません。「あなたは正しくて、こちらは違いますね」という判決を下すわけではないのです。みんなが正しいこともあります。特に保護者対応をするときには、保護者それぞれ、人生の経験も、

仕事も、生活経験も、価値観も違うのですから、先生方のおっしゃった言葉に対するイメージも違います。同じことを言っているのに、Cさんには通じて、Dさんには通じないこともあります。同じことを言っているのに、相手の連想するイメージは同一ではないのです。

保護者支援をするときに、ここを忘れないようにしてください。私たちの思っていることが通じなければいけないのではないのです。相手は、人として成人している大人であるということを忘れないようにお願いしたいと思います。

そして、親の性格は明日急に変わりません。もし私たちが「明日、性格を変えろ」と言われたらどうしますか。「明日から性格を変えてください」、「明日から生き方を変えてください」、「明日から価値観を変えてください」。子どもたちは、私たちが保育をする中で早く変わることができます。でも、保護者は、明日急に变えようと思っても、急には変われない現実があります。ですから、子どもと長時間いるということと保護者支援を一緒にしてしまうと、間違えます。

保護者に会っている時間はものすごく短いのです。朝と帰りしか会いません。それもいつも担任が会えるわけではありませんので、逆に言うと、保護者も先生方のことを知りません。ですから、これだけ長い時間、子どもを預かり育てるということがどれだけ大変で、私たちが何をさせてもらっているかということを保護者は分からないのです。その間、違う仕事をしているのですから、「もうこんな時間だ、迎えに行かなくては」ということになります。先生方に長く見てもらっていたというよりも、まるで短い時間預けていたような気分になっているのです。「もっと長く預かってくれたらいいのに。いや、もう5時だ。迎えに行かなくては」という気分で、恐らくみんな来ます。

ですから、私たちが考えている8時間という時間空間の長さ、迎えに来る人が思っている8時間は、数字で書けば一緒なのですが、感じ方が一緒ではないのです。そこを間違えないようにしないとダメです。逆に言うと、子どもたちにとっての8時間は、とても意味のある長い8時間です。ですから、子どもたちに向き合うときの8時間の過ごし方と、迎えに来る保護者に対する8時間の説明は一緒ではないので、その考え方はある種チェンジしておかないと、対応を間違ってしまう。

私は先ほど、親指と人さし指で丸を作りましようと言いました。みんな違い

ました。それぞれの考え方があります。今日は小学校の先生はいらっしゃらないと思いますが、同じことを小学校の先生や中学校の先生に聞きますと、親指と人さし指で丸と言ったら、私たちの作ったような丸はまずないのです。これが仕事の違い、当たり前の違いです。同じ子どもでも、小学校、中学校というような年齢の高い子どもさんを預かる仕事の方は、丸ではないのです。円、円周、コンパスの方をぱっとイメージするのです。ですから、親指と人さし指で丸と言ったら、くるとコンパスで円を描くようにする人が絶対的に多いのです。それぐらい、ぱっと思いつくイメージが一緒ではないのです。今度の子ども構想でも、小学校との連携・接続が限りなく言われてくるでしょうが、それぞれ対象となる年齢が違うので、私たちと小学校の先生、中学校の先生では、専門性で通じる単語、使っている言葉から違うし、イメージも違うのです。

保護者とはいうと、もっといろいろな仕事の方々が来られています。私たちはつい、この子育てと保育界の年齢が重なっているので、太陽のような、ひまわりのような、にこにこ笑っているお母さんやお父さんを求めてしまいます。「手遊びしましょう」「はい」とすぐ参加してくれるような方をイメージしていると、「愛想の悪い親だな」「乗りの悪い人ね」「あのお母さん、いつもにこにこしているいい人ね」と思ってしまうがちですが、「笑わなかったら駄目なのですか」と思う保護者もたくさんいます。すぐにしろなどとんでもない、恥ずかしいと思う人がいて当たり前です。

私たちにとっては保護者＝親であり、子どもたちにとって私たちは先生ですが、私たちは親にとっての先生ではないのです。そして、保護者の方々は保育士でも幼稚園の先生でもないのです。そして、家に帰ってからの時間は、そうじをしたり、洗濯したり、主婦の仕事、家族の仕事をする生活の場です。

私たちは同じ生活でも、子どものことに特化し、仕事としてそのことに専念することができます。でも、保護者が家に帰ってからの時間というのは、お風呂を沸かしたり、ご飯を作ったり、洗濯したり掃除したり、早く迎えに行ったので仕事を持って帰ってきたから、子どもが寝てから仕事をしなくてはいけないとか、ほかの兄弟の宿題を見なくてはいけないとか、夫婦の時間を大事にしないではいけないとか、おじいちゃんとおばあちゃんのこともあるというように、いろいろな日常生活を引きずっています。まして、家に帰ってからの時間がとても短くなっていますから、夜は寝なければいけない。朝も、目覚めたと

ころですから、ゆっくり触れ合おうという気持ちがある方でも、実際にはばたばたしています。

ですから、保護者をお願いするときも、1分1秒のできることから伝え始めないと、いきなり保育所と同じようなことを求めても無理です。それは8時間の中でやることです。このお母さんは長時間預けていないので、家に帰ってからの時間が長いとか、このお母さんは家に帰ってからの時間があまりないというように、これからは時間の長さがさまざまになってくると思います。ですから、その時間の長さに合わせた対応と支援の在り方を考えてあげないといけないのです。

家に帰ってゆっくりご飯を食べられる人は、そこでどういう触れ合いが大事かを言わなければいけないし、家に帰っても寝るのが精一杯という方には、その支援を言ってあげないといけないので、ここの温度差が今後は難しい課題です。時間はたっぷりあるけれども、余計に難しいお母さんも出てきますし、時間は短いけれども「頑張って働くけれども、家に帰ってから子育てもちゃんとやりたいのよ」という方には、いくらでもアドバイスをしてあげればいいでしょう。その時間の長短と、実際の保護者の養育力は、必ずしも比例するわけではありません。そして、相手はあくまで大人であって社会人なので、皆さんの言葉が正しく通用しているのか、何をイメージして聞いてくださっているのかということは、特に言葉のヒアリングでは難しいです。視覚にと言ったのは、見たら共有しやすくなる、同じイメージで「お母さん、このことなのですよ」と言いやすくなるということです。

ちょっと脱線しますが、ある市町村の職員の方が「保育所の先生に毎日会うけれど、仕事上、今更聞けません」とおっしゃっていました。何かというと、「うちの娘は2歳で保育所に行っています。お手紙のお便りの中に『今日もペープサートを見て楽しみました』と書いてありましたが、ペープサートという単語が分かりません」というのです。それなりの親力を持っている方です。保育界では、ペープサートはペープサートでしょう。でも、いつペープサートを習ったのですか。保育界で当たり前と言われているけれども、学生でも始めは知らないのです。この勉強をする中で知り得た単語です。それなのに、単純に連絡帳に「ペープサートをしました」と書いてある。ここの単語から意味が分からないのです。

そうであれば、先ほど視覚と言いましたように、ペープサートをしたときには、玄関のところでも入り口でもいいので、「ペープサートとはこれですよ。これで今日遊びました。名前をペープサートと言います」と出しておけば、「ああ、あれのことか」と分かっていただけます。家に帰って「割りばしちょうだい。作りたい。割りばし、割りばし」「何で割りばしが要るんだよ」「だって、作りたい」「何を作るの、割りばしで」。見ていたら、子どもが割りばしと言うのは、あれが割りばしだったから、あれを家でもやろうと思って言っているのかと、保護者の方もイメージしやすいです。養育力の高い方なら、ぴんとくるかもしれません。

その方はどうされたかという、ネットで調べたそうです。「ペープサート」で検索しました。今、保護者はほとんどネットで全部検索します。調べるとき、そういう方がとても多いです。そうすると、「紙に付いている棒で演じる」と書いてあったそうです。ますます意味が分からない。紙に付いている棒で演じるとは何か。直訳したらそういうことですが、意味が分からないと思うのです。

その方に見せてあげたら、「ああ、これのことですか。やっと意味が分かりました。でも、役所の子育て支援課にいて、お迎えに行ったときに保育所の先生に毎日会うけれども、『すみません、ペープサートって何ですか』と聞くに聞けず、ずっと困っていたんです」と言うのです。ある程度聞く力のある方でさえ、大人なので、逆にプライドもあるし、自尊心もあるので、聞きにくいということがあるのです。でも、私たちにとっては業界用語です。分からないことが分からなくなっています。これが当たり前だと思っています。分からないことが何かということに気付いて、それが子の成長に必要なのだという説明が要るわけです。

皆さんがお医者さんに行かれたとします。今、お医者さんも限りなく説明責任を求められています。かつてはお医者さんや看護師さんが、「私は医師（看護師）です。言うことを聞きなさい。あなたは患者でしょう」という時代だったのです。当然、手術をしたらするのです。「なぜしなければいけないのですか」、「必要だからです」、「だから、なぜ必要なんですか」、「あなたの体は、手術しないと治らないからです」、「もうちょっと説明してほしいのですが。しなくてもいい方法はありませんか。手術をしてどういう症状が出るんですか。教えてください」、「そんなことは聞かなくてもいいです。あなたは患者

ですから」ということがたくさんあったのです。

でも、今はセカンドオピニオンと言われるように、限りなく説明が求められます。薬も、お医者さんに飲めと言われたら、何か知らないけれどもこの赤い薬を飲むのだな、なぜこんなにたくさんあるのだろうと思っても、飲めと言われたら飲まないといけないう時代がありました。でも、今はどういう薬かということちゃんと説明をしなければいけません。どんな副作用があるかということも、ちゃんと紙ベースで見えるようにして付いてきます。言っただけでは分からないので、紙でプリントして付いてくるような時代に入っています。親切な薬局だと、間違えないようにと、さらに横にカラーで薬の写真が付いているところもあります。それぐらい説明が必要な時代になったということです。

同じことが学校教育や幼稚園、保育所にも求められています。情報公開と言われるように、社会全体のニーズがそこにあるということです。保育界の中ではそんな必要はないと思うかもしれませんが、社会全体の大きな器の中ではそれが求められています。もし皆さんの中に、自分が利用者として子どもさんを保育所に預けられている方がいらっしゃったら、そのことが分かりやすいと思います。「そんなの、昔はこうしてきたよ」と思っている方は、「なぜ」と思われるかもしれませんが、良いか悪いかは別にして、それが一つの時代の流れなのです。

今さらテレビのない時代に戻りましようと言っても、できるでしょうか。今ようやく、電気の節約のこともあって、原点に戻ろうとなってきているので、おむつの使い捨てもやめましよう、布おむつに戻りましよう、再利用、エコの時代ですよということで、必要ならば戻るチャンスの時代だとも思います。でも、なぜそれが必要なのか。子どもの成長にとっては、紙おむつよりも布がいいのです。家でも布がいいのです。いっとき洗濯が増えるけれども、その方が3年も4年も紙おむつをつけるよりはずっと省エネになるし、ごみも節約できて、エコでいいわけです。お茶も、今はペットボトルが当たり前です。家で沸かしていたらこんな入れ物は要らないわけですが、今は家でお茶を沸かす人はほとんどいなくなってしまいました。水筒もなかなか難しく、この間も遠足にペットボトルを持って来た子がいて、先生が怒っていらっしゃいましたが、保護者にしたら「やかんって何よ」という感じです。「お茶を沸かすってどういう意味?」「さあ。だって、お茶って売ってるよね。保育所に行っても、園

長先生がペットボトルを飲んでいたよね。何でいきなり水筒に変わるの？何で水筒を買って、入れ替えて持っていくの？意味が分からない」という保護者もいておかしくないのです。

あっという間に時代が変わったので、保育界はその流れに付いていっていないところがあるのですが、必要ならばなぜ必要かということを示していく。「実は子どもの成長に必要なのですよ。この子が人間らしくなっていくときには、こちらがいいのですよ」と言うのか、「もう今の時代なので、ペットボトルでもいいですよ。その代わり、このふたの開け閉めが子どもは難しいので」と言うのか。「お母さん、これを持っていても、子どもは自分で開けられないのですよ。だから、沸かさなくてもいいけれども、水筒に入れ替えて持ってきてください。水筒のこれでも今はなかなかちゃんとできなくて大変ですが、こういうことが子どもの手の発達にも、この操作をするという意味においても大切なんですよ。小学校に行っても何かにつけて水筒を持っていく時代です。クラブのときにも持っていくので、水筒の使い方も分からないというのは困りますよね。保育所でも少しずつやっていくので、申し訳ないけれども、水筒を持たせてください。買ってください」。

ここでまた問題です。どんな水筒を買えばいいのか分からないのです。大きいキャンプ用の水筒を買ってしまって、困っている。「だって、先生が大きさを言ってくれなかったから」、「いや、常識的に考えて、これでは大きくて重すぎませんか」、「だけど、こっちの方が後々家族も使えるから私はいいと思ったのです。こんな小さいもの、子どもしか使えないでしょう」という保護者が来て苦情になることもあり得るのです。ですから、そこを私たちは想像しないとイケないのです。

当たり前と思っても、本当に限りなくみじん切りにしてあげないと、今の保護者にしたら分からないことばかりです。世の中のコンビニがなぜこれだけはやっているのか、なぜコンビニの商品があれだけ売れるのかということ、ほとんどコンビニの生活をしている人が増えているからです。コンビニ生活をしている人が多いのです。スーパーに行って、市場調査をしてください。社会がどういう時代か。小学校に行っている子どもの保護者は、年齢が高いわけです。一番先に変化してきて、保護者が変わり始めるのが保育界なのです。ですから、世の中が知る前に、一番初めに感知しなければいけないのは、一番年齢の低い

子どもを預かる場所です。そこがセンサーになって、今、子どもたちに何が起きているのか、お母さんたちの何が分からなくなってしまうのかということキャッチして、最低限保護者に伝えていかなければいけないことは何なのかをそれぞれの園において考えるのです。それは地域性によっても違いますし、保護者によっても違いますし、保護者力によっても違いますし、園の方針によっても違っていいのです。

「うちはしんどいお母さんが多いので、ソフト面はできるだけやってあげよう。水筒も全部園に置いておいて、空の入れ物だけ回収しておいて、全部まとめてこっちで入れましょう」という形で支援をすることの方が、今日も水筒を忘れたという思いを子どもにさせるよりはいいのかもしれないです。もしかしたら、日常の中でも水筒というものを置いておいて、子どもが飲みたいときに自分で加減してそとつぐということも、教育的配慮として、子どもたちの学習場面としてセッティングするのもいいかもしれません。「やかんでは重いので、朝、それぞれの水筒に入れるよ。でも、これだけだよ。1日で考えて飲むね」と教えるのです。

4～5歳になったら、自分で飲みたいものを加減できる力がある方が、小学校に行ってからいいかなと思われる先生がいらっしゃったら、それも保育の在り方です。これは親の仕事だとおっしゃるのなら、それでもいいのです。ただし、ちゃんと説明をしてあげないと、今はコンビニに行ってもスーパーに行っても、ペットボトル入りのお茶が売られています。これは専業主婦かどうかは関係なく、沸かす人の方が絶対値として少なく、みんな買っているわけです。買っているという前提で、水筒なら水筒の在り方をどう考えるかということですね。全部いっぺんには難しいですが、いろいろな世の中の在り方と生活様式の変化を私たちは知って考えることが必要です。

文科省も「食育」と言うけれども、食育とは何かをすることだけではなくて、うちの園の地域性、保護者力はどういう食生活になっているか。それを受けてどう考えるかはそれぞれの園で判断するのです。「うちの園は、車で食べている子がどうも多いな。じゃあ、ニンジンが赤いという色にも気付かないかもしれない。何でも食べればいいと思って、味わうということも学習していないかもしれない」。すっぱいも辛いも甘いもなくて、見て美しいもなくて、食べればいいというのでは、人として潤っていない。やはり、きれいなね、おいしいね

ということは大事です。「赤い色、ニンジン、ピーマン、グリーン、何？」と言いながら、もの名前を覚え、ものの色を覚えるのです。

小学校のときに「ピーマンは何色?」「知らない」では困りますが、「だって、見たことないもん」。保育所でも全部混ぜられていて、絵本では見たかもしれないけれども、実物は知らない。でも、小学校の学びの中で、理科、社会、国語の読解力、何にでも出てきます。人が人になっていく力として、そういう最低限の最善の利益の生活をイメージすることはとても大事です。では、それぞれの園において、どういうことが生活としての最善の利益になるのか。保育所や幼稚園がこども園という名前に変わっても、それをどう保証していくのか。

ですから、たくさんではなくても、何々保育をしなくても、意識を変えることで解決できることがあります。もし見て楽しむということがとても大事だと思われたら、「お母さん、送り迎えはもう暗闇でも仕方ないですよ。でも日曜日、土曜日、たまにでもいいし、例えばお誕生日のときだけでもいいので、せっかくケーキを買うときには『見て、ケーキだよ』って。そうすれば、子どもはケーキを買ってもらったこともちゃんと覚えるし、そのときに見たケーキは白かったのか、チョコレートケーキだったのか、イチゴが乗っていたのか。そのときに『これはイチゴっていうんだよ。おいしいね』と言うだけで、子どもの言葉力が付き、お母さんがしてくれたという思い出も残るよ。そのとき、白という色も、イチゴの赤という色も、イチゴケーキといったときに『ああ、あのことだ』という記憶力もちゃんと育つんだよ。その1秒のことですごく教育的になるので、お母さん、せっかくケーキを買うのだったら、ぜひお願いしますね」と言うかどうかは別ですが、そういうことを日々の生活の中のチャンスの種にしてもらえるようなことが、実は保護者を育てることであり、保護者を支援し、子どもたちの成長・発達を促す元になるのです。

そうすると、たった1個のことに見えるけれども、「そんなことに意味があるんだ」と気付く保護者力のある方は、その次からも言うてくださるかもしれません。「そうか、言わなかったら子どもって記憶に残らないんだ」「お母さん、ケーキを買ってきて、ぱくぱくと食べてしまったら、覚えてくれないよ。せっかく高いケーキを買ったのだから、『これがケーキよ』と言った方がいいよ。1歳だからって、分からないのではないよ。分からなくても『ケーキ』と言っていたら、今度絵本で見たときに、あのケーキと一緒に子どもは気付くかも

しれないよ」。誰も保証できませんが、そういうことだけでも大事なのだと伝えていくことが幼児教育であり、実は乳児から教育が始まっているということです。

それぐらい具体的にもじん切りにして言ってあげないと、保護者の方々は「じゃあ、ドリルをすればいいんだ」とまた飛んでいくのです。「絵本を100冊読めというから、100冊読みました」。あるいは逆に「もう無理、無理。忙しいから何もできません。保育所をお願いして終わり、子育ては保育所の仕事、私たちはやりません」ということになってしまうのです。だから「できる1秒というのはたくさんあるのよ、お母さん」ということです。

何かをしなかったら、絵本を読まなくては、触れ合い遊びをしなくては教育ではないということではありません。「ただいま」と顔を見てもらうだけでも十分です。それで「ただいま」「お帰り」という言葉のやりとりをちゃんと子どもは覚えます。それが無い子どもは、「ただいま」「お帰りなさい」とやりとりが教科書に出てきても、そのイメージが描けないのです。『「ただいま」って何?』『知らない』。それではちょっと人生が寂しくないですか。だから、せめて保育所、幼稚園、こども園に迎えに来たときには、「ただいま」「お帰り」と声を掛け合いましょう。子どもに無理強いしなくてもいいけれども、私たちが「お帰り」と言えるように教育するので、お母さんも「ただいま」と言って教育してくださいと。1秒でいいのです。

1秒から始めてあげないと、いきなり100分、200分の内容を要求すると、今の保護者はあふれてしまいます。やろうと思う人はまた特化してしまって、いきなり勉強みたいに走って行ってしまいます。ほどほどが難しい。ぜひそこを覚えておいていただけたらありがたいと思います。

5. 保育シーンにおける子育て支援

先ほど第6章の保護者支援に位置づけられている意味と課題・社会的責任・親との密接な関係を、大まかですがお話ししました。幼稚園も、幼稚園教育要領の中に「家庭との連携」という言葉がちゃんと入っています。こども指針になったときに、この部分がどういう言い方になるかは分かりませんし、こども指針が出てこないかもしれません。今、構想だけが練られていて、どうなるかは分かりません。

でも、出てきたときに、「すべての子どもとすべての家庭」と国が示している以上、専業主婦であろうがなかろうが、子育てをすることを介護と同じようにバックアップしなくてはなりません。そうしないと、子どもの成長・発達、次世代のこの国の人間力、そして次世代の親子関係・家族力が、限りなく大変になります。既に変になっていることが、さらに悪化する可能性が高いです。それを防止するには、専門家である私たちが、子どもを預かっている時間、その子どもたちに出会った大人として、どういうモデルになっていけるのか。どんな言葉を掛け、どんな経験をさせてあげるのが最低限の最善の利益になるか。そこをぜひ考えておいていただきたいと思います。

6. コミュニケーションを通じた保護者との関係づくり

先ほど言いましたが、親になる前にどんな子ども時代を過ごしてきたかということは見えないし、聞けないし、分かりません。小さいときに良い子ども時代を送った方ならば、親や先生にしてもらったことが記憶にあるので、別に勉強しにいかなくても、それを思い出して再現できます。病気のときに、何をしてもらったか。お母さんがおかゆを作ってくれた方は、自分の子どもが病気になったとき、「おかゆを作ればいいな。おかゆって、あれのことか」と分かるわけです。

最近、日本語が通じないのです。「りんごのすりおろして何ですか」、「ごりごりって何ですか」、「おかゆって何でしょう」。おじやは分かるし、雑炊は食べたことあるけれども、おかゆは分からない。「よく似たものなんですけど」と言うのですが、「おかゆ」という単語が分からない人もたくさんいます。ここでイメージが共有できないと話が次に進まないのです。

これは若い先生方も一緒です。つまり、子ども時代に病気になって、おかゆを食べさせてもらったとか、りんごをすって食べさせてもらったとか、おなかが悪いときは消化の悪いものを食べてはいけないという、当たり前の、「どこかで誰かが言っていたよね」という経験です。単語帳を作って覚えたのとは違います。育児書を見てではなく、生活の中で自分が経験してきたこと、人生の中でおじいちゃんやおばあちゃん、地域の方、近所の方、いっこ、おばちゃん、自分の保護者などから聞いてきたこと、どこかで見てきたことが、今の保護者にはほとんどないのです。これは、地方にはまだ現存していますが、都会にな

ればなるほど難しいです。

してもらっていない保護者の連絡帳に「私はおかゆを知りません」とは書いていません。外から見える洋服が美しいとか、おしゃれであるとか、あのお母さんはきっちりしているとか、全く関係ありません。いつも苦情を言っている、そういうことはちゃんとできる人もいます。ですから、これは私たちもバイアスが掛からないようにしないと、朝の1秒、帰りの1秒、送り迎えと連絡帳だけでは、その人がどういう子ども時代を送ったかなど、さっぱり分からないわけです。

ですから、一応みんな分からないつもりで、分からないかもしれないという前提で、誰々さんということではなく、日常的に「おなかを壊したときにはこうなんですよ」という情報をどう発信しておいてあげるか。1カ月に1回の保健だよりでもいいですし、掲示板のどこかに掲げておいてもいいので、どこかにおなかを壊したときのレシピ集のようなものを置いておく。病院などだと、腎臓病の人や糖尿病の人向けの冊子がよく置いてあります。私も病院でそれを見て、保育所をこれもやらなければいけないと思ったのですが、おなかを壊したときのレシピとか、頭痛のときとか、お金の困ったときにはどこに行きましょうという情報発信が必要です。だから、これからはさりげなくそういうことも情報発信しておくのです。今さらネットを構築しようなどと思ったら、また人を雇わなくてははいけません。お手紙を1回出しても、そのとき役に立つ人もいれば、その日は要らないけれども後で役に立つ人もいるわけです。ですから、お手紙の中で必要なものは、できるだけ簡潔に、見やすいものとして、できれば絵なども入れてまとめておく方が情報発信としては有効で、「そうか、おかゆってこういうことなのか」と気付いてもらえるかもしれません。

分からないのに、「お母さん、おかゆを食べさせてくださいね」と言われたら、家に帰ってから「おかゆって何？あの先生、むかつく」と勝手に思っているかもしれません。「おかゆ下さい」と買いにいったら、コンビニに売っています。買って来たのはいいけれども、鉄のスプーンで食べさせてやけどをさせている親もいます。どろどろは熱いのです。これは理科の問題にもなるのですが、イメージができません。いくら理科で100点を取っている人でも、目の前のおかゆがどろどろで、これは鉄のスプーンで子どもの口に入れたらやけどしてしまう、せめてフーフーして自分が口に入れても熱くないようにしてから食べ

させようとは考えないのです。プラスチックのスプーンの方が熱くない。これは熱伝導の問題です。これもどこかで知っていたはずなのだけれども、そういうイメージもないので、買って来て張り切って食べさせたけれども、子どもはべっとする。「何で食べないのよ。せっかく買ってきたのに」と無理やり入れて、よけいにやけどをする。やけどしたことに気付かずにまた口に入れて、子どもが泣く。園長先生の言うとおりにしたら大泣きして食べてくれなかった、二度としない。こうなると子どもが一番の被害者になります。

分からないということは、そういうことなのです。そういう分からない人が増えているのです。赤ちゃんとは何なのかということなど、もっと難しい課題になります。分からないから起こるので、鉄のスプーンは熱いから×、プラスチックは○というように書いておいて、見えるようにして、あのスプーンだったら大丈夫、あれは駄目なのかとさりげなく気付いて学習できるような親育てをしてあげないといけないのです。

これも実際にあったのですが、りんごをすってもすっても茶色に変色して、全部腐っていると思って捨てて、果物屋さんで文句を言いに行った保護者がいらっしやるのです。りんごはすってしばらく置いたらすぐに茶色になる。これも当たり前の常識のようですが、気付かない方、分からない方がいます。りんごはかじって食べるもので、すったことのない方、すったものを見たことがない方は、「まあ、こんなに茶色になってしまって、大変だ」と思って食べさせない。「では、塩をちょっと入れれば?」。そんなことは誰が教えてくれたのでしょうか。理科の実験ですか。それぐらい生活が変わってしまって、地域、地域と言うけれども、本当に家族の中の当たり前の伝言ができていない。これからの子どもたちは、家の台所でご飯を作る場面も見えていないので、そういった当たり前の生活イメージがもっと減少してきます。

7. 子育て支援、保護者支援のために必要な保育士間の連携

それを受けて、子どもの成長に必要なならば、園の中で作る場面を見せてあげる。子どもがクッキングするのは大変なので、作っている場面を見せてあげて、「ああやってするんだ」というようなことが保育の中で必要だと思われるならば、そういうことが要るのかもしれませんが。電気というのは勝手についているのではない、あの電線を通して来るのだということも、子どもたちは知りませ

ん。ぴっと押したら、ぱっとつくと思っています。でも、そういうことは、子どもたちが知っていて当たり前ではないか。そうしたらそれは教育として、保育の内容として伝えていく必要があれば、伝えていくことが大事です。

ですから、「生活が変わった」と字で書けば一言ですが、ありとあらゆるものに視点が二つあります。子どもが未来に生きるために必要だから教育の視点で伝えていかなければいけないことと、世の中が変わって養育力がなくなってしまっている保護者に対してどう伝えていくかということです。この比重が、今の保育所はどちらかといえば逆を向いています。分からない保護者に一方的に要求し、イメージできない子どもたちにやろうとしていたのですから、逆です。

子どもたちは、みんなで一緒に経験して再現できる場面を作ってあげないと、ごっこ遊びは流行っていきません。共有イメージが持てないので、一緒に何かを経験して、それを遊びにできるようにしないと、子どもの関係性というものもなかなか大変です。イメージの違う世界で対話しているので、永遠に仲良くなれないという現象が起ってきます。そこも踏まえての子どもの育ちであり、一方で、残念ながら保護者はもう大人になってしまったのです。そういう経験をしないまま、パブルの中でどんどん便利になって、気が付けば親になってしまって、子どもを育てましようと言われても、意味不明だという状態になっています。赤ちゃんなど見たこともないのです。例えば、文部科学省が指定して、中学生が体験学習で保育所に来ているでしょう。あれは子どもを見にくるツアーみたいなものです。つまり、中学生になるまで子どもにも会っていないのです。赤ちゃんどころか、道を歩いても、中学生が歩く時間に子どもが歩いていないのです。

兄弟姉妹がいたとき、いどこに会える時間があるときはよかったです。しかし、いろいろな関係、親戚のつながり、地域のつながりがなくなった中で、自分より幼い子どもに出会うという経験がなくなりました。そのことによって自分も勝手に大きくなったと勘違いしている。小さい子に会うことで、「小さいというのはこういうことなんだ」、「僕もこういう時代があった」とふと思春期に立ち止まり、大きくしてもらったことを感謝できなければいけないのに、立ち止まることができないまま大人になってしまって、勝手に大きくなった気分があるので、子どもはそのうち勝手に大きくなるだろうという子育ての

間違いが始まるのです。

そのために、わざわざ中学生が来ているのです。受け入れている先生方はそのことを理解して、「好きに遊んでおいてね」ではなく、「あなた方もこんな時代があって、勝手に大きくなったんじゃないよ。子どもというのは大人と一緒にではないんだよ」、「この時代にいろいろな人がかかわって、育ててもらって大きくなったのよ。字を書いたり、考えたり、見たりできるのも、誰かが育ててくれた結果なんだよ」。それはお父さん、お母さんではないかもしれない。施設の職員かもしれない。保育所かもしれない。親戚のおじさんかもしれない。でも、育ててくれる人に会って、今あなたの命があるということを中学生に伝えておいてもらう。いずれその子たちが親になりますから、単なる体験で終わらないようにお願いしているわけです。

でも、本当に困っているのは、生まれたての赤ちゃんを産院から連れて帰った直後です。これは国も予算の加減でどうなるかが最も分からないのですが、介護も老人ホームなどに行けばしてもらえるけれども、そこに行くまでの在宅の方がとても困っていました。それで在宅ケアのヘルパーができたわけですが、それと同じように、産院から帰って保育所に行くまで、人間教育で一番大事な最初のボタンのところで、もうすでに掛け違えが起こっている子どもさんがとても多いです。

ついでに言っておくと、ちょっと前、電話がありました。笑い話のような本当の話なのですが、「先生、うちの子は足が動くんです」と言うのです。動かないという相談なら分かるのですが、足が動く相談とは何かと思ったら、「足が動くんです。だからおむつが替えられないんです。どうしたらいいんですか」。よくよく聞いて分かりました。保健センターの母親教室で、人形を使っておむつ交換をしました。そのとき、人形の足は動かなかったというのです。「それは人形だからで、子どもは人形じゃないのだから動くに決まっている」、これが私たちの常識です。でも、今の保護者の方々は、もちろんそこをイメージできる人もいますが、しんどい家庭層のしんどいお母さんはそのことすらイメージできなくて、「何で」と思うってしまうのです。

そのお母さんは、実は家庭的に困っているような方ではなくて、考えすぎたのです。上の子どもさんが幼稚園に行っている方なので、養育力もそれなりにあって、専業主婦をしている方だったのですが、「足が動く。どうしよう。う

ちの子、おかしいんじゃないかしら」と考えすぎて、隠す。誰にも言えない。抱え込む。動くのがおかしい、動かないのが正常という判断をそのお母さんはしてしまって、「動いたら困る。パパにも言えない。おばあちゃんにも言えない。どうしよう。お願いだから動かないで」とぐるぐる巻きにして縛り付けて、余計に脱臼していたのです。

だらんとなってしまって、ほっとしている。それでもおむつを替えるときに動く。赤ちゃんは何とか動かそうとするわけです。おむつが替えられない。「いえいえ、お母さん。動いていていいですよ」と言ったら、今度は「じゃあ、どうして保健センターは、『これは人形です。あなたの子どもの足の動きません』という説明をしてくれなかったのか」と言って怒りだされました。「そうですね。保健所に言っておきます」と申し上げたのですが、「まさかそんなイメージもできないなんて」と思われるかもしれないけれども、分からないということはここまで来ているということです。

ですから、今、気になるグレーゾーンの子どものさんがどんどん増えているのですが、その最初のボタンの掛け違いによって、結果的に子どもの成長・発達を逆流させてしまっている保護者もかなりいらっしゃると思います。結果は同じになってしまうのだけれども、「何かが変」が、何だろうというのは、養育力の困難さが結果的にボタンの掛け違いになっているのです。

この間も、子育て相談にこんな方がいらっしゃいました。今、下の子どもさんは2歳になっているのですが、その子が生まれたとき、保健所の方も幼稚園の先生もみんな「お姉ちゃんを見なきゃ駄目」とおっしゃったそうです。「下の子に気を取られたら、上の子がひがむので、上の子を見てください」というのはよく言うセリフです。でも、そのお母さんは、まじめと言えまじめなのですが、見ろと言われたからとお姉ちゃんしか見ていないのです。ずっとお姉ちゃんの後を追いつけています。どう見てもお姉ちゃんはびくびくして、見張られている状態なのです。下の子どもさんはというと、目の前をうろうろしているのに、お母さんは一生懸命わざと目をそらすのです。

「お母さん、逆。下の子を見なくては。限りなく多動なので。上の子はそんなに見張らなくてもいいですよ」「ええ？ そんなこと初めて言われました。どこの研修会に行っても、上の子を見ろと言われました」「それはちょっと誤解かもしれません。『見ろ』という意味が違うんですよ」「見ろという意味にい

ろいろあるんですか。下の子を見ちゃいけないというから、視野に入ってくるのを一生懸命そらしていたんです。見ていいんですか。私、見たかったんです」「見ていいですよ」。

見たら、下の子は2歳ですが、「なぜお母さんは、今日僕を見るんだ」というすごびっくりした顔をしています。「名前を呼んで、ちゃんと見て」と言ったら、初めて名前を呼んだようで、「名前呼んでいいんですね。太郎ちゃん、太郎ちゃん」と言ったら、子どもの方がぼかーんと「それは誰のこと？」みたいな顔をしていたので、本当に目をそらしてこられたのだと思いました。これは専業主婦の方です。一生懸命、育児相談から、勉強会から、こういった研修に行き倒しているようなお母さんです。熱心なのですが、その話の聞き方、ヒアリングの仕方を間違えると、そういうことが起こって、ボタンを掛け違えることになってしまいます。

うちの先生も、「熱心だし良いお母さんなのですが、でも、何か子どもが変なんですよ」という感じなのです。そこでくみ取っていかないといけないのですが、先ほど言いましたように、聞いた言葉の通じる度合い、言葉のヒアリング力というのは、今、限りなく難しくなっています。そして、子どもたちも同じように言葉力が少ないです。ですから、先生がおっしゃる言葉をちゃんとその子が聞いてイメージできているかどうか。もともと言葉力が少ないところに、家に帰ってお母さんとしゃべる時間もほとんどない。家族が少ない。聞いている分量が少ない。そうすると、保育所で使う単語は非常に偏っていますので、保育界の用語では通じるけれども、小学校へ行ったら全然分らないということが起こり得るのです。

乳児の場合は、同じようなことを言っているつもりでも、年齢によって先生の言う言葉が違っていたりすると、去年は落ち着いていたのに、今年は落ち着かない。乳児を受け持つ先生は、使う単語、言い方、表現、ものの置く手順性、そういうこともできるだけうまく連動していけるようにしておかないと、しんどい子どもさんは言い方が違うだけでも違う単語に聞こえてきたりします。「お洋服を着替えましょう」と言う先生と、「体操服を着替えましょう」と言う先生がいるのです。「着替えましょう」しか言わない先生もいます。そうしたら、全部同じことを言っているけれども、聞こえる言葉が違うので、通じている子はいいますが、しんどい子どもさんは、「体操服」と言ったらイメージできる

けれども、「着替えましょう」と言ったら何か分からない。「着替える」という言葉と「体操服」が結び付いていない。

このころというのは、言葉が育つ時期です。私たちは言葉掛けをすると言われていますけれども、シャワーのように言葉を掛けるのではなく、ものと言葉が一致しているかということ踏まえた言葉の掛け方、配慮の仕方を考えなくてははいけません。そうしないと、コミュニケーションを取るときに、子ども同士の関係も難しく、先生が指示している言葉の受け止め方も子どもによって誤差が出てきます。先生の言い方に慣れていない子は反応するけれども、慣れていない子は反応できない。結果として、成長を軸にするということが、またしんどくなるのです。ですから、園に長くいるようになればなるほど、私たちはそういうことも気を付けていかないといけないのです。

家から来たての子どもさんは、「給食よ」などと言っても全く通じません。家にいた子は家で給食などと言いませんから、給食＝ご飯が出て来るというイメージはないのです。「ご飯よ」と言ったら通じる子もいるかもしれません。その辺も今まで以上に私たちは考えなくてはならないのですが、先生が負担に思う必要はありません。少しだけ気付けてくだされば十分です。

いっぺんに全部変えていこうとすると、現場の先生は「ああ、もう気が狂いそうで、おかしくなる。もう無理、この忙しいのに。考えたら何もしゃべれない」となるので、そんなことを思われる必要はありません。ただ、そういうことで通じていない子はいないか、保護者がきょとんとしているときは、私の言う言葉が通じていないかもしれないという視点はお持ちいただいた方がいいかなと思っています。そのことが三つ目の「子育て支援、保護者支援のための連携」ということにも関係し、環境の変化ということにもつながってきます。

ですから、乳児にどういう言葉を言っているか。3人クラスにいて、3人違う言い方をしたら、子どもはびっくりします。特に乳児の場合、教育的配慮であえて違う言葉を使うなら、それで結構です。はじめは一緒にするならば、ご飯のときは「ご飯」と言うという保育士界の共通理解がないと、同じクラスにいて、同じ部屋にいて、それぞれが違う表現をしたら、しんどい子どもさんが多くなればなるほど通じない。私が言ったら通じる、私が言ったら通じないということが起こる。混乱が不安定要素を生むとってください。

8. 効果的にコミュニケーションを行うポイント

「子育てあ・い・う・え・お」と書いていますが、保護者の実態を把握して、一つひとつ、1個ずつやっていくことです。このお母さんは1秒から、このお母さんは食事、このお母さんは排泄のこと、このお母さんは「ただいま」だけでも言ってもらえるようにしようとか、このお母さんは大丈夫だから抱っこしてもらえると、このお母さんは勘違いしているけれど、言ったら分かるお母さんだからもう少し説明してあげた方がいいかなというようなことは、人によっても違うので、少し考えてください。

大事なものは長期計画です。介護に支援計画があるように、明日から急に変わってしまうと思わないことです。乳児で来られた場合は、しんどいお母さんほど、卒園するまでにはここまで親らしくなってもらおうという見通しを持って、まずここから攻めていく。先ほど言ったように、性格は急に変わりませんし、急に経済状態が良くなるわけでも、急に手づくりご飯が作れるような親になるわけでもありませんので、ある程度支援計画を持たないと、保護者対応は難しいと思います。

そして、慌てない、急がない、結果を求めないことです。保護者は急には変わられません。専門性も違うし、仕事もさまざまですが、親子のきずなをどう作るかというのは、お母さんが子どもを置いていくとき、せめて1秒振り返っていただく。できれば握手でもして触れて、できればちゃんと目を見て、それもできなかつたら声だけでもいい、声も掛けられない人は振り向くだけでもいいという段階を踏むことが大事です。振り向くことも嫌な人に、いきなり抱っこしてくださいと言ったら、「何でそんなことしないといけないのよ」という苦情になるので、まずは振り向いて「バイバイ」と言えるかどうか。それも無理な方は、先生とだったら大丈夫なのか。まずは大人に対して真っすぐ前を向いてくれる方なのか、下を向いて来られる保護者なのか。

大人に対して真っすぐ向けないと、わが子まではなかなか向けません。その分、預かっている私たちが大人のモデルになれるようにする。お母さんが1であれば、先生は99考えてイメージして努力しないとイケないですし、お母さんが50%大丈夫であれば、まあ安心していても大丈夫だから、その分、どんな遊びをしていたかということをお母さんに報告してあげようとか、その辺のところは傾向と対策を一律にしないでイメージをお持ちになった方がいいです。

先生方も、全員公平だからといって、「せえの」と頑張りすぎると、かえって不公平が発生すると思ってください。

9. 多様化する子育て支援の課題とは

保育はどんどん長時間化しています。逆に言うと、短い時間の人も、こども園構想になったら入ってきます。今まで幼稚園に行っていた方々が来るようになると、短時間で今までの保育所のような利用をする方が出てくるので、保護者がいろいろになってきます。

それから、病児対応、保護者対応です。今日はあまり時間がないので言いませんが、預かり時間の長い保護者と短い保護者、今の幼稚園型の保護者と保育所型の保護者がいて、行事や保護者会をするときに、誰に時間を合わせたらうまくいくのかという問題が、既に認定こども園などでも起こっています。参加できない方は当日だけでもとか、それも駄目だったらお金を払えというのがいいかどうかは分かりませんが、何らかの形でどこかで参加できるようにしないと、専業主婦の方に全負担が行くとか、全部夜にという形にすると、恐らくもめることが起こってきます。その辺のところは、少し時間はあると思いますので、見通しておかれたらいいのかなと思っています。

10. よりよい関係を築くために

よりよい関係を築くためのコミュニケーション実践手法というのは、事例を通しながら、園内で、またはクラスで、具体的にどうするか、1秒と言ったらどんな1秒にするかをイメージしておかないと、保護者支援とは何かという入り口で止まってしまいます。保護者支援とは何かと言ったら、永遠に何の支援もなく、先生方もしんどくなりますし、保護者は変わりません。たとえ1秒でも振り向いてもらって、「お母さん、振り向いてくれるようになったね。じゃあ、できれば顔を見てくれる？ 視線を合わせて。視線を合わせるのは大事なんだよ。お母さんの今の美しい顔を覚えておいてもらわないと困るので、できれば目を見てくれた方がいいですよ。20年後に覚えていてくれないよ。これだけ長いこと迎えに来ているのに」というような形でやっていく。

「ちゃんと目と目を見て、お顔も見て、できれば手を触れた方がいいよ。今のこの小さな手をお母さんも覚えておいて。子どもたちも、お母さんの大きな

手、こんな大きな手になりたいなと思うことが大事。触れてください。できれば抱っこしてみてください。このごろ重くなりましたよ。生んだときに比べれば、こんなに大きくなった。でも、今しか抱っこさせてもらえないよ。小学校に行ったら、寄るな、触るな、近寄るな、あっち行けと言われますよ。今のうちに触って。喜んでくれるときに1秒だけでも。家に帰れば忙しいので、「そんな、赤ちゃんみたい」、「まだまだ小さいし、昼間離れているので、1秒でもぎゅっとしたら子どもは満足するので、1秒だけ、お迎えに来たときだけお願いできますか」。これは例えですが、1秒親子が親子でいるためにきずなをどう作るかということは、これぐらい具体的でないとい今の保護者はイメージできないし、変化しませんし、無理と思った瞬間に二度とやってくれなくなるので、みじん切りにする必要があると思っておいてください。

11. こどもを取り巻く環境の変化と生活経験の関係

保護者の生活が変わり、時代が変わったことによって、子どもたちの生活が変わり、結果として子どもの育ちや発達保証が難しくなってきました。「昔の子どもは」と言うけれども、今の子どもの成長・発達は、すべて生活様式と全部変わってきた結果です。そこから先はそれぞれの園で、だからどうするかということを考えてください。

保護者に伝えるときもそうです。この間、ある公立の園に行ったとき、とても美しいトイレだと私は思ったのですが、そこはマンションが多くて、トイレのふたが勝手に開いて閉まるおうちが多い地域だったのです。そうしたら、保護者から「こんなスリッパを履き替えて行かなければならないような旧式のトイレを先生方が当たり前と思っているので、保育が変わらないのですね」と言われたというのです。トイレの改造をするわけにもいかず、すぐ落ち込んでおられました。

でも、「こんな大昔のトイレで」と不思議に思う保護者の方がいてもおかしくはない。ですから、地域性によるのです。まだまだ和式のトイレが当たり前のところもあれば、ホテル並みのマンションが多いと、勝手にふたが開いて、勝手に閉じて、手もぱっとやれば全部センサーでというのが当たり前というところもあるでしょう。お風呂もピッとやれば勝手に沸くのが普通だと思っている保護者がたくさんいらっしゃることは、保育所に来て「何とまあ、古い」

と思われるかもしれませんが。そこが保護者の意識の違いにつながっているの、覚えておいてください。

先ほど言ったことですが、しつけは、子どもたちが「ああ、おいしい」とか「トイレに行きたい」という中の自立性が前提です。単に厳しくすることがしつけではないので、そこも覚えておいてください。

12. 子どもとのふれあい

最後に、そのメッセージを読んで終わりたいと思います。

「あなたはあなた たったひとりの存在」。これは保護者もです。保護者もたった一人のあなたであるということです。

「生命を受け、赤ちゃんだった私たち。様々な出会いと経験を経て、今大人である私たち。先生である前に、人として自分を振り返ってみてください。あなたは子ども時代を卒業しましたか」。

保育士さんも子ども時代を振り返ってください。私たちは、勝手に今あるわけではありません。保護者も、子ども時代があって、今親になっています。そして、子どもたちは、今の子どもたちがそれをもって未来の大人になります。未来の大人にとって、今どういう時期か。そこを覚えて、保護者の支援、そして子どもの育ちの保証ということをお考えいただけたらと思います。

「1日1秒からはじめよう。おしえてよ、ほくってどんな子ども。おはなしして、わたしてどんな子ども。あなたは子どもの名前をよんでいますか。1日1秒子どもの名前をよんでいますか」。保護者の方で、何をしていいかわからない方は、せめて名前だけでも呼んでもらってください。

そして、「子育てのあ・い・う・え・お」。「保育の『あ』は？ 小さな生命を愛してください（触れる）。保育の『い』は？ つぶやく言葉を意識してください（見る）。保育の『う』は？ 大きな気持ちを受けとめてください（聞く）。保育の『え』は？ 笑顔をたいせつに（意識する）。保育の『お』は？ おはなししましょう（忘れない）」。

最後まで、どうもありがとうございました。